

榎 有恒著『山行』

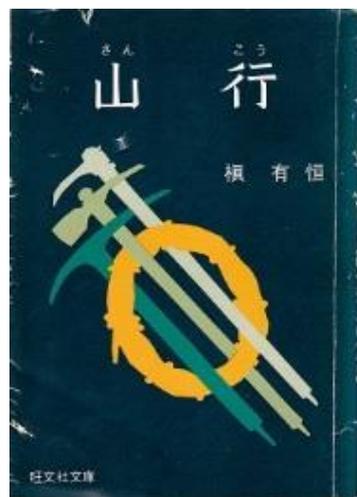
著者はアイガー東山稜の初登攀者(1921年)として、登山の世界では世界中に名を知られているが、本邦での登山がその黎明期から開花期に転換する時期に活躍された山岳界の大御所であり、我が国に近代アルピニズムをもたらしたアルピニストであった。その足跡は国内はもとより、欧州アルプス、ロッキー山脈、台湾、ヒマラヤまで及んでいる。

本書は主に、若き日のスイスのベルナーオーバーラントとツェルマツト地方を中心とした登山の記録、現地の山村の人と自然、人々との交歓などが綴られたものであり、著者の処女作である。

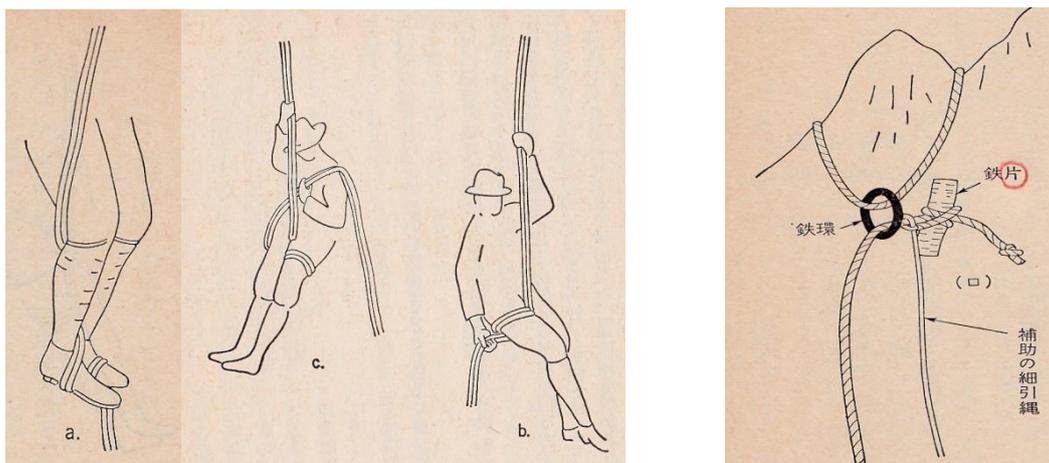
現地グリンデルワルトの山案内人3人と初登攀したアイガー東山稜の記録も「登高記」の中に記載されていて、途中で遭遇した絶巔の稜線をたった200m乗り越えるのに8時間を要したり、露営を含めて35時間の苦闘の様子が落ち着いた静かな筆致で描かれている。苦闘の末、下山終点である登山電車のアイガー・グレッチャー駅に辿り着いた時は午前3時になっていたそうだ。「登高記」には、これ以外にもメンヒ、ヴェッターホルン、マッターホルンなどの山行記もあり、往時の登山の様子が偲ばれて興味深い。

また、「山村の人と四季」の一編は、グリンデルワルトの四季の自然や人々の暮らしが丁寧に綴られていて、それらの姿が目浮かぶようである。

本書には、ちょっと趣向を変えた「岩登りについて」という一項があり、当時の日本では未だ一般的でなかった岩登りの論考と欧州アルプスで使われている技術を紹介している。その中には懸垂下降の方法の図(下図)も掲載されていて往時の方法が偲ばれる。cの変形は、現在でもハーネスが無い時の非常用の方法として用いられる場合もあるが、aは珍しい。また、懸垂ロープのセット方法では、懸垂ロープの長さを一杯に(折り返しの半分長ではなく)使うための方法として現在でも現役である。



(東山稜初登頂後グリンデルワルト駅にて。左から2人目が榎)



また、大正12年の1月、榎、板倉勝宣、三田幸夫の3人パーティーが立山弥陀ヶ原・松尾峠で猛吹雪のために遭難、板倉が凍死し、また残る二人も凍傷や低体温症で死地を彷徨った時の艱難辛苦で壮絶な有様を記録した「板倉勝宣君の死」の一編は、読む者をして涙を誘われずにはおられない。

初版：大正12年(1923年)改造社刊。冒頭の書影は旺文社文庫版(1973年刊)

なお、著者の自伝は『わたしの山旅』(岩波新書) [\[本シリーズ別稿\]](#) に詳しい。いずれも品切れ。

[「山書の小溪」目次に戻る](#)